

蜃気楼アート 富山湾の神秘を無限大に 千葉の2人企画、生配信も

社会 | 速報 | 富山

毎日新聞 | 2023/5/30 22:30(最終更新 5/30 22:30) 883文字

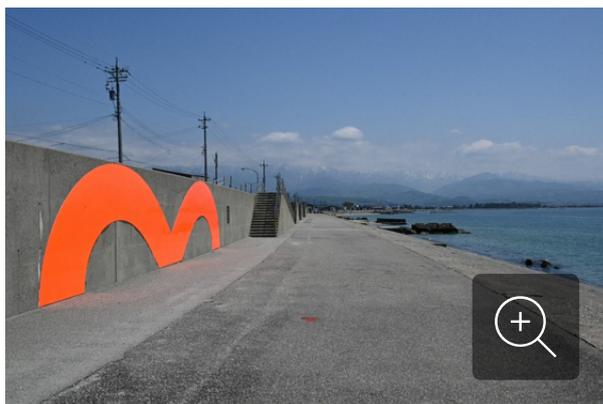


蜃気楼を生かしたアートプロジェクトに挑む(左から)佐藤真樹さん、山下麻衣さん、小林直人さんら=富山県魚津市の「海の駅蜃気楼」前で、青山郁子撮影

富山湾の春から初夏にかけての風物詩「蜃気楼(しんきろう)」。この不思議な現象をアートにしようというプロジェクト「インフィニティー(無限)～ミラージュ(蜃気楼)」が4月に始まった。千葉県のアートユニット「山下麻衣+小林直人」の2人が2021年秋に続いての再企画で、2人は「来年3月までの期間中いろいろな展開を計画しているので、お楽しみに」と話している。【青山郁子】

蜃気楼を生かしたアートプロジェクトに挑む(左から)佐藤真樹さん、山下麻衣さん、小林直人さんら=富山県魚津市の「海の駅蜃気楼」前で、青山郁子撮影

魚津埋没林博物館(富山県魚津市)によると、蜃気楼は、空気中で光が屈折することで景色が実際とは違う形に見える現象。春に多く出現する「上位」型は、実際の風景の上側に伸びたり反転したりする虚像が出現するのに対し、冬に見られる「下位」型は、実際の風景の下側に反転した虚像が見えるのが特徴。いずれも、暖かい空気層と冷たい空気層の境界で光が屈折して発生するとされ、気温や風の動きが関与していると考えられている。



「海の駅蜃気楼」(右側奥の沿岸部)から約8キロ離れた生地海岸堤防に設置された「M」型の看板=富山県黒部市で2023年4月27日、青山郁子撮影

魚津埋没林博物館(富山県魚津市)によると、蜃気楼は、空気中で光が屈折することで景色が実際とは違う形に見える現象。春に多く出現する「上位」型は、実際の風景の上側に伸びたり反転したりする虚像が出現するのに対し、冬に見られる「下位」型は、実際の風景の下側に反転した虚像が見えるのが特徴。いずれも、暖かい空気層と冷たい空気層の境界で光が屈折して発生するとされ、気温や風の動きが関与していると考えられている。

春の蜃気楼は、4～5月に10～15回程度しか出現せず、毎年ほぼ確実に出現する場所は、魚津市や大津市など数少ない。一方、冬の蜃気楼は、視界がよければ毎日のように出現し、全国各地の海岸で見ることができるという。

2人の蜃気楼プロジェクトは21年秋から冬にかけて初挑戦。この時は、実際の風景の下に反転した虚像が見える下位型蜃気楼が出現し、実際の「m」の文字の下側に反転した「m」が現れ、見事な「∞(無限)」が完成した。今回は、

年間を通じた観測を目的に同博物館と富山県黒部市美術館とともに実行委員会を作り、同県魚津市の「海の駅蜃気楼」の観測スポットにカメラを設置。富山湾を挟んで約8キロ離れた生地海岸の堤防に、横約14メートルのオレンジ色の「m」型看板を再度設置した。



2021年に撮影されたきれいな形の∞(山下麻衣+小林直人《infinity~mirage》ライブ配信映像から)

今年4月28日には「m」の上に∞がのっかって見える上位型蜃気楼が出現。カメラの映像は美術館の[ウェブサイト](#)で来年3月中旬までライブ配信する。

プロジェクトに参加する同博物館の佐藤真樹・学芸員は「この作品は富山湾の蜃気楼のことを知ってもらう機会として面白い。大気の状態によって蜃気楼の見え方が違うということを実感できるのでは」と期待している。

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは(株)フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.